

[特集：香港の過去と現在]

日本占領下の香港とシンガポールにおける 戦争とメディア

——映画上映からみた比較研究——

War and Media in Hong Kong and Singapore under Japanese Occupation:
A Comparative Study Focusing on Film Screening

松岡昌和

MATSUOKA Masakazu

一橋大学大学院言語社会研究科

Graduate School of Language and Society, Hitotsubashi University

E-mail: mmatsux@gmail.com

Abstract

During the Second World War, Japanese Army occupied Hong Kong and most of the Southeast Asian area. This paper investigates how popular media was utilised in the Japanese military administration in such area focusing on film screening in Hong Kong and Singapore, both of which have similar history and culture. Using the newspapers published in both city, this paper revealed that American and British films were screened during the initial stage of Japanese occupation in both cities, the programmes were determined in each city separately whilst another film propaganda policy was planned in Tokyo and Hong Kong had more wartime Shanghainese films than Singapore.

1. はじめに

1941年12月8日未明の日本軍によるマレー半島上陸によって始まった日本と英米との戦争により、日本陸軍は香港および東南アジア地域の多くを占領し、それぞれに展開して作戦を遂行していた集団が軍政を敷いた。本稿では、陸軍の軍政下に置かれた香港とシンガポールにおけるメディアの利用、特に映画というポピュラー・メディアについて考察す

る。従来、日本の戦時期における文化・メディア政策については、上からの厳しい統制や総動員体制と結びついた否定的なイメージでとらえられることが多かったように考えられる。また、植民地や占領地における文化・メディアについては、日本の当局による現地文化の抑圧、さらには現地住民の日本文化への同化という側面で捉えられることがしばしばであった。そうした側面は当然あるものの、こうした評価は現地住民を受け身の存在ととらえ、かれらの主体的な動きを無視することになりかねない。また、日本が第二次世界大戦期までに形成した広大な帝国は一樣ではなく、文化政策やメディア政策のあり方は地域やアクターによって多様であらざるを得なかった。こうした点を考慮に入れ、帝国日本における文化・メディアが実態としていかなるものであったのか、改めて検討していく必要がある。

ここでの研究の目的は、第二次世界大戦期に日本陸軍の占領地となった香港およびシンガポールにおいて、映画がどのように上映されていたのかを明らかにすることである。それにより、日本の帝国支配がどのような原理で行われおり、どのような限界があったのかについての示唆を得ることができよう。香港とシンガポールに注目する理由としては、第一にその類似性があげられよう。両都市とも19世紀にイギリスの植民地となることによって都市としての開発が進み、イギリス帝国のアジアにおける交易・軍事の拠点となっていた。そして、両都市とも第二次世界大戦によって日本陸軍の軍政下に置かれることになった¹⁾。第二に、両都市ともイギリスの支配のもとで都市としての開発が進み、その過程で多くの近代的要素が持ち込まれたことがあげられる。後発の帝国である日本が、イギリスによる直接の近代化・都市化を経験した香港とシンガポールにおいて、どのようなメディア・文化政策を行ったのかを検証することは、近代の日本人の他者認識やアイデンティティにつながる問題を浮き彫りにすると考えられる。

香港とシンガポールを含む南方占領地の文化・メディア、とくにポピュラー・メディアについての研究の蓄積は決して多いとはいえない。日本の東南アジア占領についての研究のなかでも、この領域についての研究史は比較的短いといえる。1970年代に明石陽至が日本占領下マラヤの教育についての研究を発表して以降 [Akashi 1976]、教育を中心に関心を集めていたが、次第にその他の文化・メディア政策についても研究が行われるようになる。南方占領地を広くカバーした論集としては、1991年にグッドマン編集による英文の論集が刊行されており [Goodman ed. 1991]、日本の東南アジア占領についての研究としては大きな進展が見られたといえる。その後、英文および日本語において、南方占領地のメディアを取り上げた研究が発表されているものの、現時点でこの領域には未だなお明らかにされるべき点が多いと言える。特に、それぞれの占領地を対照させる研究は、日本

1) 両都市の近代史の比較としては、岩崎 [2007] があげられる。

の帝国支配の実態を明らかにする上で今後さらに必要となるだろう。

ここで取り扱う戦時期の香港とシンガポールにおける映画については、個別に研究がなされてきた。香港については、映画研究者の余慕雲が著した香港映画史についての詳細な文献である『香港電影史話』の第3巻で、戦時期について一章を割いて記述している[余 1998]。また、映画史研究者のポシェク・フは、1930年代から50年にかけての上海と香港の映画関係者のコネクションをひもときながら、映画をめぐる政治学について考察している[Fu 2003]。これらは日本占領期香港の映画事情を知る上で貴重な研究ではあるが、その関心の中心は香港での映画製作や大陸との関わりを香港の歴史のなかに位置づけることにあり、当時の香港のメディア状況を広く帝国日本のなかで考察していくところにはない。また、香港と日本との間の映画をめぐる関わり方の歴史については、映画研究者の邱淑婷が両地域の映画交流史をまとめている[邱 2007]。邱の関心の中心は戦後の香港と日本との映画人の交流にあり、戦前期・戦時期についても記述しているが、中国大陸における日本人の映画産業・プロパガンダへの関わりが中心である。

戦時期のシンガポールにおける映画については、先行研究は乏しい。これは、当時のシンガポールが映画製作の中心たりえなかったことによるものであろう。その他の東南アジア地域についてみると、シンガポールと異なる部隊によって統治されたジャワについては、歴史研究者の倉沢愛子がオランダに保管されていたフィルムを調査し、戦時期における映画製作や映画興行の実態を明らかにしてきた[倉沢 2009]。それに対して、シンガポールについての詳細な研究はじゅうぶんになされているとは言えず、シンガポール映画史研究においても、戦時期についてはごく簡単な記述にとどまる²⁾。戦時期のシンガポールにおける映画興行については、筆者自身によって、その解明の取りくみが行われた[松岡 2017]。本稿では、その調査の成果をもとに、新たに香港での日本映画の上映について調査し、それを比較・総合することで、帝国日本における文化・メディアの総体的な研究の第一歩とするとともに、現地社会と日本との関わり方の歴史についてより詳細に明らかにしていくことをめざしたい。

本研究では、戦時期の香港およびシンガポールの映画上映について調査するにあたり、現地で刊行された新聞の映画広告を主な資料として使用する。香港については、日本人の手により『香港日報』の日本語版・英語版・中国語版がそれぞれ刊行されていたが、本稿では映画広告について最も詳細に掲載している中国語版を使用する。なお、筆者は香港大学図書館所蔵のマイクロフィルム版を使用した。これは香港での日本軍による統治が始まって約半年経過した1942年6月以降のものであり、またこれ以外にも若干の欠落が存在することを予め断っておきたい。シンガポールについては、軍政の管理下に置かれた英

2) たとえば、Uhde and Uhde [2010] など。

字新聞 *Syonan Times* (国立国会図書館東京本館所蔵マイクロフィルム版) を使用した。*Syonan Times* は1942年12月に *Syonan Sinbun*、1943年12月に *Syonan Shimbun* と改称している。

香港とシンガポールの両都市における戦時期の日本による文化政策の比較については、香港における日本研究者の呉偉明が考察している [Ng 2014]。呉は、香港とシンガポールの違いについて、統治の戦略および民族構成の問題をその理由としてあげている。ここでは呉の指摘を一つの導きとしつつも、さらに詳細なメディア状況の把握を行うことを目的とし、日本の帝国支配や現地認識の総合的な理解の一助としていきたい。以下、南方占領地における映画工作についての日本内地での議論をまとめたのち、両都市における映画の上映について見ていきたい。なお、「4. シンガポールにおける映画上映」の記述の多くは筆者自身による過去の研究成果 [松岡 2017] の一部を改変しまとめ直したものであることを予め断っておきたい。また、「2. 南方映画工作」についても筆者自身による過去の研究成果 [松岡 2015] と一部重なる記述がある。

2. 南方映画工作

日本の南方における映画工作は、1940年12月に設立された南洋映画協会がその先駆けである。1940年に日本軍はフランス領インドシナ (仏印) に進駐するが、同地を主な対象としたのが南洋映画協会である。同協会はその後東南アジア各地に支社を設立し、配給映画の選定、日本映画の現地向け編集、他地域への映画輸出などを手がけた [加藤 2003: 205]。その後、日本が対英米戦争に突入し、東南アジア各地を軍事占領すると、1942年9月に「南方映画工作要領」が策定された。そこでは、南方占領地での映画工作の内地の機構との連携と強力な統制が謳われ、南洋映画協会に代わり、現地の映画製作については社団法人日本映画社 (以下「日映」と略記) が、映画配給や映画興行などについては社団法人映画配給社 (以下「映配」と略記) が担うことになった。日映、映配ともに昭南と改称されたシンガポールに総支社が設置され、香港を含む東南アジア各地に支社・支局が設立された。その機構については、加藤 [2003: 208] が右の図のように整理している。

1942年12月には内閣情報局第3部局内に南方向映画選定委員会が設置され、翌年「対外映画選定委員会」と改称した。同委員会では占領地に送るべき作品の選定を行っており、ここで選定された作品は、映配のネットワークを通じて南方各地の興行に供されることが期待されていた [加藤 2003: 209]。選定された映画は劇映画にとどまらず、文化映画、外地向け短編映画、ニュース映画、中華電影・満映などの作品も含まれていた。映画雑誌『日本映画』改新12号 (1944) に掲載された選定映画一覧に香港およびシンガポールでの上映状況を加えた表を本稿の末尾に示す。

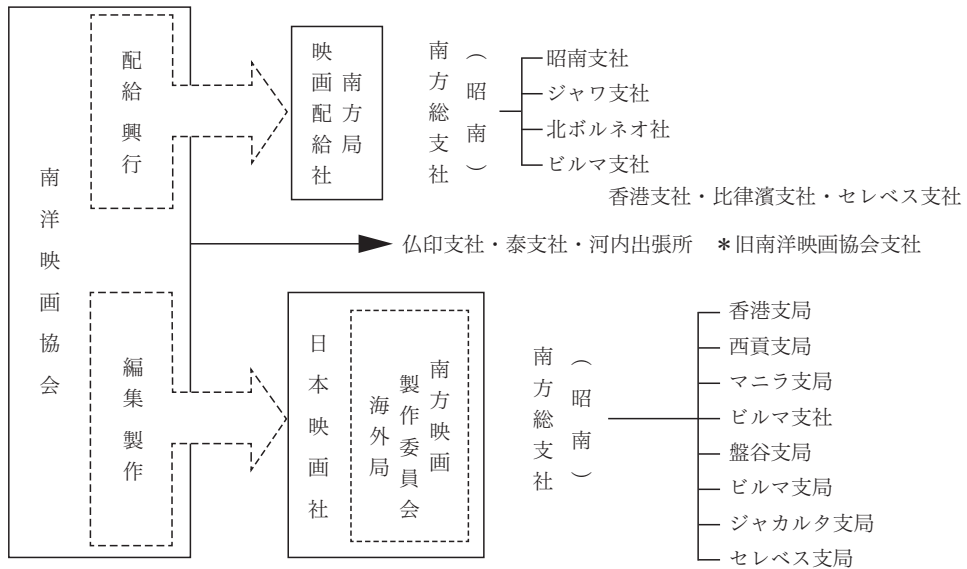


図1 南方映画工作における映配・日映の機構・業務内容

以上の日本内地での決定を踏まえ、香港およびシンガポールでも映配を中核とした映画興行が行われるようになる。香港では、1941年12月25日に日本の軍政が開始され、翌1942年1月には劇場が再開され始める [邱 2007: 35]。統治機構のなかで映画の管理を担っていたのが、香港総督部報道部であり、そのなかの芸能班の班長を務めたのは和久田幸助という人物である。和久田は自らの回想で、特に芸能について精通しているわけではなく、広東語に堪能であるという理由で職務を委任されたと記述している [和久田 1991: 21]。和久田については、同時代の史料においても記述が乏しく、また本人による記述も記憶に頼っているためか曖昧な内容が多い。東洋経済新報社『軍政下の香港』によると、総督部報道部のもとで、1942年1月に香港電影救済会が設立され、同年6月に「香港電影協会」と改称し、同会が配給業務を担っていた [東洋経済新報社編 1944: 293] (余慕雲 [1998: 56] は香港電影協会の設立を1942年3月8日としており、まもなく「華南電影協会」と改称したと記述している)³⁾。日本内地での南方映画工作についての方針策定を踏まえ、1943年1月1日に総督部公示によって映配香港支社が香港における映画の配給と興行を担うこととなり [東洋経済新報社編 1944: 293]、支社長には武山政信が就いた。

シンガポールでは、1942年2月15日にイギリス軍が降伏し日本の軍政が始まった。新聞は間もなく各言語版が刊行されたが、その後の日本軍による華人虐殺もあり、現地社会

3) 『軍政下の香港』では「香港電映救済会」・「香港電映協会」としているが、いずれの「電映」も中文で「映画」を意味する「電影」の間違いであると推測される。本稿では「電影」と表記する。

が安定を取り戻すには時間を要した。市民に対して映画上映が再開されたのは、陸軍報道班員の北町一郎によれば1942年4月5日のことである。この上映会は現地新聞の従業員とその家族を対象を限定した上映であり、劇場での一般公開は最初の天長節に当たる同年4月29日以降のことである [北町 1942: 13-14]。同年5月になると、新聞において各劇場で上映される作品が紹介されるようになる。映配は1942年10月1日に昭南支社をオーチャード・ロード275に開設しているが、内海信二総支社長のシンガポール到着が同年11月30日、昭南支社員の到着は同年12月18日である [田村 1943: 67]。映配が実際にシンガポールにおいて機能し始めるのは1943年1月ころと考えられる。『Syonan Sinbun』の映画広告欄には同月から映配の配給であることを示す映のロゴが使用されるようになる。

現地の映配は内地で策定された南方映画工作の方針についてどのように捉えていたのだろうか。南方映画工作についてはさまざまな映画雑誌で議論が行われていたが、ここでは映配の現地責任者が参加した座談会を紹介しておきたい。『映画旬報』1943年7月1日号に掲載された座談会「南方映画工作の現段階」では、映配の南方総支社長内海信二、ビルマ支社長桑原謙次、香港支社長武山政信、昭南支社長新館繁の4人が参加している（以下、史料の引用については漢字を適宜新字体に改めて引用する。中文史料についても同様）。

ここで特に香港支社長の武山と南方総支社長の内海の発言に注目したい。武山は「現時点」での緊急時として「敵性映画」、つまりアメリカ映画を禁止しなければならないという事情に触れて、そのためには映画の量が必要だということを説いていく。アメリカ映画を禁止すると「日本の劇映画と文化映画で大部は埋めなければなら」ず、映画を選別しては映画館を持たせるだけの数量にはとても足りない。劇映画を含めた多量の映画を厳しい選別なしに送ることがアメリカ映画を禁止するためには必要条件であるとの立場を示した。

これには内海も同意する。現状での「日本から送られるプリント数、及び映画の種類では、アメリカ映画を禁止してしまふと、結局相当の映画館を閉鎖しなければならなくなる」のが実情であり、現地住民から「映画を取り上げることは、宣撫工作、治安の面から考へても重要な問題」であり、現実的ではないと述べた。

その後、議論は南方映画選定委員会不要論に及んだ。前述の量の問題を取り上げて、武山は質の問題にこだわる選定委員会を強く批判する。そもそも事前検閲が存在し、映配各支社で現地情勢は把握しているのだから、委員会は不要だという主張である。それによって南方に供給されるフィルムが減ってしまうことが彼らにとって問題なのだ。

結論として、内海は「でき得る限り多くの映画人が一日も早く南方に多くきて、南方を見て貰ふ」ことが南方文化工作に貢献することになると述べて座談会を締めくくっている。全体として、フィルムの量が大切であること、映画関係者は南方を訪問してきちんと

実情を把握することが必要であることが参加者4人の一致する意見として表明されていた。

1942年になると、占領地では映画の上映が徐々に始まるが、当初その方針は占領地がそれぞれ個別に策定し、管理を行っていた。一方日本内地では1942年9月になって「南方映画工作要領」が策定され、一元的な方針を定めていった。それをもとに各占領地に映配支社が設置されていった。しかし、現地の映配の責任者は、現地の事情を目の当たりにし、日本内地で決定されていく方針に対して批判を強めていった様子がわかる。

3. 日本占領下香港における映画上映

1944年に出版された東洋経済新報社編『軍政下の香港』では、映画について以下のよ
うな記述がある〔東洋経済新報社編 1944: 292〕（漢数字を算用数字に改めた）。

「大東亜戦前に於ける香港映画界は、アメリカ映画に風靡されてゐた。即ちワーナー、
メトロ、パラマウント、二十世紀フオックス、ユニバーサル、ユーナイテッド、
アルケーオー、コロンビアの8米国映画社が香港に支社を置いてアメリカ映画を配給
し、中国映画はアメリカ映画に圧倒されてゐた。戦前香港には大小13の粵語（広東
語）映画撮映所があり、また北京語映画の撮映も若干行はれてゐたが、配給及び興
行の方向では、粵語映画はアメリカ映画の敵ではなかつた。映画館の数は香港側16、
九龍側（大埔を含む）22、合計38であつた（演劇専門館を含む）。」

ここでは、戦前の香港においてアメリカ映画が人気を博していたこと、また香港が映画
製作の拠点であったことが述べられている。1941年12月に日本が英米と戦争状態に突入
し、日本軍が香港を占領した後も、直ちに香港において英米の映画が上映禁止になつたわ
けではなかつた。同書においても「敵性映画の上映が停止されたのは昭和十八年一月以
後」とあり〔東洋経済新報社編 1944: 293〕、それまでは英米の作品が上映されていたこ
とがうかがえる。1943年「一月報道部立会の下に開かれた映画関係代表者の会合に於て、
一月十六日を期し敵性映画の上映停止を審議、決定した」とあり、映配の業務開始と並行
して、映画興行の抜本的な変更が行われていたことがわかる。

では、実際にどのような映画が上映されていたのであろうか、香港における外国語映画
の上映については、「Play It Again 故影集：香港外語電影資料網」（[http://playitagain.info/
site/](http://playitagain.info/site/)）⁴⁾というサイトがあり、1900年から1999年までの100年間をカバーしている。中国語

4) 2017年12月31日最終確認。

と英語（一部日本語のローマ字表記）で作品が登録されているため、作品を特定する際の大きな助けになる。しかし、これは公的機関あるいは学術機関が作成したものではなく、データの欠落もあり、さらに香港における公開年でのみ登録されているため、実際にどの映画がいつ上映されていたのかをすべて捕捉できるわけではない。そこで、ここでの情報を一つの手がかりにしながらも、『香港日報』における映画広告から上映作品について考察したい。

3-1. 1942年における上映作品

まず、英米の作品が上映禁止となっていなかった時期においてどのような作品が上映されたのかについて見ていきたい。この時期の劇場では、さまざまな演目があったことがわかる。たとえば、図2は『香港日報』1942年9月12日号に掲載された広告である。ここでは、アメリカ映画のほか、広東語映画、北京語映画、さらに演劇も多く上演されていたことがわかる。

The image shows a dense collection of theater advertisements from the 1942 issue of 'Hong Kong Daily News' (Chinese edition). The ads are arranged in a grid-like fashion, featuring various theater names and their respective plays. Notable titles include '雷雨' (Thunderstorm) and '阿片戦争' (Opium War). The ads are written in vertical columns of Chinese characters, with some including illustrations and dates.

図2 『香港日報』(中国語版) 1942年9月12日

ここで、この時期の演劇と映画について触れておきたい。図2の広告では、「旅港影人劇団」(平安戲院)と「華南影人劇団」(明治劇場(旧皇后戲院))というふたつの映画関係者による劇団が上演を行っていることがわかる。日本軍による香港占領後、軍政部報道部の監督のもとに組織された香港電影協会によって、映画関係者による劇団が組まれた。旅港影人劇団は1942年4月に上海から来港し香港に留まった映画関係者によって組織されたものである。同年12月までに、中国の作家巴金による作品を改変した『家』や劇団員自らが創作した『阿片戦争』など12の演目を上演していた[余 1998: 57-58]。華南影人劇団は、華南電影協会と改称した香港電影協会の広東語映画関係者により組織されたもので、1942年9月には『北京人』と『雷雨』という作品を上演している[余 1998: 58-59]。図2からは、『雷雨』を上演していた様子が見える。

映画では、この時期は対英米戦争にありながらも、アメリカ映画を中心に英米の作品が上映されていた。図2には、『マルクスの二挺拳銃』(Go West, 1940、中文名『新西遊記』)と『ターザンの逆襲』(Tarzan Escapes, 1936、中文名『泰山歴険記』／『野人記三集』)の2作品の題目が見える。いずれも戦前期に香港で公開されたアメリカ作品である。これらのほか、『タイフーン』(Typhoon, 1940、中文名『風火島』)や『シー・ホーク』(The Sea Hawk, 1940、中文名『海上霸王』)といった冒険物語、『カンサス騎兵隊』(Santa Fe Trail, 1940、中文名『飛騎将軍』)や『北西騎馬警官隊』(North West Mounted Police, 1940、中文名『騎軍決戦史』)といった西部劇、『銀嶺セレナーデ』(Sun Valley Serenade, 1941、中文名『雪花飛舞』)や『オズの魔法使』(The Wizard of Oz, 1939、中文名『緑野仙踪』)といったミュージカル(いずれもアメリカ作品)、さらにイギリスの作品として『バグダッドの盗賊』(The Thief of Bagdad, 1940、中文名『月宮宝盒』)も上映されていた。1942年6月には映画演劇検閲規則が公布され、皇軍に対して不敬になるものや国策を害するもの、敵国に有利になったり敵国への羨望の念を助長するような内容については、上映を中止したり一部を削除するなどの措置が取られることになった[余 1998: 60-61]。しかし、その検閲の内容については明らかではない。

これら英米の作品のほか、この時期の香港では、フランスの作品が複数上映されている。その中には、『乙女の湖』(Lac aux Dames, 1933、中文名『青春樂園』)や『背信』(Abus de Confiance, 1937、中文名『背信』)といった、この時期に香港初公開となる作品も含まれている。フランス作品については『乙女の湖』について中文と並んで日文字幕も付されていること(『香港日報』(中国語版)1942年6月17日)、またこれ以外に上映された『女だけの都』(La Kermesse héroïque, 1935、中文名『女人的城市』)に英語圏での配給時と異なる *A City Only for Women* という英文名が付され、日本語名の『女だけの都』も併記されていることなどから[『香港日報』(中国語版)1942年9月3日](本来の英文名は *Carnival in Flanders*)、日本側が持ち込んだものと推察される。

日本映画については、1942年11月までは散発的の上映が目立つ。7月から8月にかけては『東京の女性』(1939)が複数の劇場で上映されているが、その他の日本映画は散発的である。7月には『国性爺合戦』(1940)が上映されているが、数日のみの上映で終了したものと見られる。また、11月には『母の灯』(1941)と『家庭教師』(1940)がそれぞれ上映されているが、「軍人軍属映画鑑賞会」での上映であった。6月26日と27日はそれぞれ別の劇場で『帝国海軍勝利の記録』(1942)と『帝国海軍勝利の基礎』(1942)が上映されているが、一日限りである。これが特別な記念日と結びつけた催しであるかどうかは紙面では報じられておらず、上映の背景については不明な点も多い。

12月になると、『転落の詩集』(1940)、『桜の国』(1941)、『英国崩るるの日』(1942、中文名『香港攻略戦』)が相次いで封切り館である娯楽戲院で公開されている。『英国崩る

るの日』は戦時期の香港において製作された唯一の日本映画であり、対英開戦の一年後である1942年12月8日に公開されている。この時期になって、日本映画は香港の劇場において通常のプログラムとして上映されるようになったと考えられる。これらの作品のほか、通常の映画上映の前後には日本のニュース映画が上映されていたほか、戦争に関するニュース映画を集めて上映するケースも見られた。劇映画については1942年段階ではじゅうぶんに投入されているわけではなく、観衆の目にさらされる日本の映像は主としてニュース映画であったと言えよう。

中国語映画について、日本占領期には新たな劇映画は香港では製作されていない⁵⁾。香港で製作され、この時期に新たに公開された作品は戦前に撮影され未公開となっていたものである。余慕雲によれば、1942年に3作、1943年に5作、1944年には1作が公開されている。1942年には『血浴残花』と『蓬門碧玉』が[余 1998: 61-62]、1943年には『痴兒女』、『人海飄零』、『生死鴛鴦』、『弦断曲終』、『上海屋簷下』が[余 1998: 71-72]、1944年には『齊侯嫁妹』が公開されている[余 1998: 75]。その他1942年に上映された中国語映画は過去の作品の再上映が多いと推察される。

1942年の段階では、日本側による映画興行のコントロールは相対的に弱いものであり、ニュース映画が本編の前後に上映されたのを除いて、日本映画のプレゼンスは大きいとはいえない。それに対して、アメリカ映画は過去の作品の再上映ではあるが、冒険物語、西部劇、ミュージカルとさまざまなジャンルが提供されていた。一方中国語映画は新作の香港映画がほとんどなく、過去の再上映や映画関係者による演劇が中心であった。

3-2. 1943年以降の上映作品

1943年1月より、香港では映配香港支社による映画配給・興行が行われるようになった。これにより映画配給の主体は現地側（香港電影協會／華南電影協會）から日本人側（映配）の手に渡るようになり、その結果統制も強まっていったと考えられている。実際、同年2月後半にはフィルムの登録が義務付けられている[余 1998: 68-69]。

前述の通り、香港で英米の作品が上映停止となるのは1月16日であるが、紙面での広告によると、実際に1月15日までは英米の作品が上映されており、その後停止している。それまでは、前年同様、アメリカの西部劇やミュージカル映画などが上映されている。その間に上映されたものとしては、西部劇の『荒野の略奪』(*Bad Man*, 1941、中文名『鉄羅漢』)やミュージカル映画の『美人劇場』(*Ziegfeld Girl*, 1941、中文名『昔飛路美女』)などがあげられる。

5) 記録映画については、香港総督部報道班の賛助により香港電影協會が製作した『新生の香港』が1942年12月8日に公開されている[余 1998: 66]。

その後、西洋の作品はフランス、ドイツ、オーストリア、ソ連といった日本にとっての同盟国、中立国の作品に限られるがその作品数は多くない。1943年から45年の日本の敗戦までの間に香港での上映が確認されるヨーロッパ映画として、以下の作品があげられる。1943年にはオーストリアの『ハンガリア夜曲』(*Die ganze Welt dreht sich um Liebe*, 1935、中文名『舞姫艶史』)、フランスの『海をつわもの』(*La Porte de Large*, 1936、中文名『風流水手』)、ドイツの『夜のタンゴ』(*Tango Notturmo*, 1937、中文名『怕聽銷魂曲』)、ソ連の『陽気な連中』(*Veselye rebyata*, 1934、中文名『醉舞狂歡』) ドイツの『世界に告ぐ』(*Ohm Krüger*, 1941、中文名『南阿亡国恨』) が上映されている。1944年に新たに公開されたヨーロッパ作品はなく、1945年にはドイツの『狂乱のモンテ・カルロ』(*Monte Carlo Madness*, 1932、英語版、中文名『砲轟滿地卡羅』) フランスの *Le Parfum de la dame en noir*, 1931 (日本語名不明、中文名『香草美人』)、ドイツの『ガソリン・ボーイ三人組』(*Die Drei von der Tankstelle*, 1930、中文名『風塵三俠』)、フランスの *Le Chanteur inconnu*, 1931 (日本語名不明、中文名『神秘歌王』)、ドイツの『若きハイデルベルヒ』(*Ein Burschenlied aus Heidelberg*, 1930、中文名『学生艶史』) が上映されている。なお、南アフリカ戦争を取り上げ、反英プロパガンダ作品として仕上げた『世界に告ぐ』については、対外映画選定委員会による1943年度の選定映画である。その他のフランス、ドイツ、オーストリア、ソ連の作品について、敵愾心を煽る要素は見られない。

1943年1月に英米の作品がスクリーンから姿を消した後、それらに取って代わったのは日本映画だけではなかった。紙面の広告からは、日本映画よりも多くの中国映画が上映されていたことがわかる。すでに述べたように、この時期に新たに公開された香港映画は極めて少ない。ここで上映されていたものの多くは、過去の作品や新華影業公司(新華)、中華聯合股份有限公司(中聯)、中華電影聯合股份有限公司(華影)といった上海の映画製作機構による作品である。1939年以降、日本は華中・華南地域における組織的・計画的な映画工作を図り、そうしたなかで同年6月中華電影股份有限公司(中華電影)が設立され、華中における映画配給が一元化され、そこに日本側の影響が及ぶようになった。1942年4月には中華電影と新華など映画製作三社により中聯が設立され、上海の映画製作会社は一元化された。そして、1943年5月には中華電影と中聯など三社が合併し、華影が設立された。華影は汪兆銘政権の宣伝機関としての性格が強く押し出されるようになった⁶⁾。香港でも日本や汪兆銘政権の強い影響を受けた上海で製作・配給された作品が上映された。

上海からもたらされた作品には、対外映画選定委員会の選定映画となっている作品がある。1942年に製作されて1944年度の選定映画となっている『恨不相逢未嫁時』は1943年

6) 上海における映画製作・配給機構の統合過程については、加藤 [2003: 194-203] による説明を参照。

2月に上映され、1943年の選定映画となっており、香港出身で上海の映画界で抜群の知名度を誇る女優である陳雲裳がヒロインを演じた1942年製作の『歡樂年年』は1943年10月に上映され、1944年の選定映画となり陳雲裳と李香蘭が共演した1943年製作の『萬世流芳』は1943年11月に上映され⁷⁾、同じく1944年の選定映画となっており、1943年に製作され東宝歌舞団を出演させた『萬紫千紅』は1944年4月に上映されている。選定の時期と上映の時期が前後することから、選定映画となっている上海の作品は選定を踏まえて上映されたのではなく、異なった背景によって香港のスクリーンに映し出されたものであると言えよう。これら以外にも、陳雲裳が救国のヒロインを演じた『木蘭從軍』(1939)など、多くの上海の作品が香港で上映されている。

日本映画については、対外映画選定委員会の選定映画のみならず、後述のシンガポールと比べても多くの作品が上映されている。1943年と44年については、各年50作品程度の劇映画が新たに公開されている。また、45年には21作品の劇映画の公開が確認できる。その中には、『愛機南へ飛ぶ』(1943)、『翼の凱歌』(1942)、『加藤隼戦闘隊』(1944)、『海軍』(1943)、『望楼の決死隊』(1943)といった戦争に関わる作品、『南海の花束』(1943)、『シンガポール総攻撃』(1943)、『マライの虎』(1943)などの南方占領地に関わる作品、『支那の夜』(1940)、『戦ひの街』(1943)、『上海の月』(1941)、『蘇州の夜』(1941)、『熱砂の誓ひ』など中国大陆を取り上げたもの、中国の歴史を描いた『阿片戦争』(1943)、歴史のなかで日本の大義を表現した『奴隸船』(1943)など、地域性や政治色、軍事的色彩を帯びたものも少なくない。しかし、それにとどまらず、『家光と彦左』(1941)、『独眼竜政宗』(1942)、『一乗寺決闘』(1942)などの時代劇、『エノケンの爆弾児』(1941)、『エノケンの水滸伝』(1943)などの喜劇、そして『伊賀の水月』(1942)など娯楽作品、『華やかなる幻想』(1943)など音楽映画、『純情二重奏』(1939)など歌謡メロドラマ、さらにはヨーロッパの文学を題材とした『田園交響楽』(1938)や『愛の一家』(1941)など、さまざまなタイプの作品が上映されていた。

それでも、たびたび上映される作品にはいくつかの傾向が指摘できる。『支那の夜』、『戦ひの街』、『蘇州の夜』、『熱砂の誓ひ』といった李香蘭が主演をつとめ、中国大陆を舞台とした作品は特に多く上映されている。『支那の夜』の広告では、中国を描いていることが付記されている(図3)。また香港に深く関わる『阿片戦争』も特に多く取り上げられている作品である。しかし、それ以外に特に多く取り上げられるジャンルは見いだせず、どのような基準で上映が繰り返されているのかについては明らかではない。

いまひとつの傾向として、特定のできごとや記念日に応じて、上映される映画が決まる

7) 陳雲裳と李香蘭の共演が中国でどのように解釈されたかについては、晏 [2010: 156-158] による説明を参照。

ケースも見られる。すでに対英開戦一年後にあたる1942年12月8日に『英国崩れるの日』が公開された例は見たが、そのほかにも、1943年の陸軍記念日に合わせて陸軍落下傘部隊を描いた『空の神兵』(1942)とフィリピンにおける陸軍の作戦を記録した『東洋の凱歌』(1942)が、開戦後二年に合わせて1943年12月にはアニメ作品『桃太郎の海鷲』(1943)と『陸軍航空戦記』(1943)が、1944年の陸軍記念日には記録映画『富士に誓ふ』(1943)と『聖紀の体育祭典』が、1944年の海軍記念日に合わせて『海軍』(1943)がそれぞれ上映されている。ただし、これらのほとんどは記録映画であり、劇映画の上映とは区別して考えるべきであろう。

1943年9月下旬からは映画の広告に

「節省電力」の文字が現れるようになる。同月から香港では石炭・石油といった燃料の不足により電力不足が問題となり、劇場は交代で休業するようになる[余 1998: 72-73]。

映画雑誌『日本映画』第9巻4号(1944年4月1日号)に香港における1943年11月の配給実績が紹介されている。そこには、以下のようにある(漢数字を算用数字に改めた)。

劇映画では、日本映画の配給本数27、配給館数58、動員観客数81916。中国映画の配給本数123、配給館数233、動員観客数298749。フランス映画の配給本数1、配給館数3、動員観客数2227。〔中略〕なほ中国映画「萬世流芳」は11月20日から23日まで明治劇場に於て特別興行の形で公開、〔中略〕入場人員は6429人であつた。

戦前期の香港においてはアメリカ映画の影響力が圧倒的に強かったとされている。日本陸軍による占領後はアメリカ映画が引き続き上映されたが、1年経過すると全面的に禁止され、また映画の配給と興行は映配が担うことになった。そこで日本映画の導入が図られていったが、それでもなお、香港における映画の中心は日本映画ではなく中国映画にあったと言えるだろう。

図3 『香港日報』(中国語版) 1943年9月22日

4. 日本占領下シンガポールにおける映画上映

次に、シンガポールについて見ていきたい。戦前のシンガポールで上映された映画の多くはアメリカやイギリス、中国の作品であった。そのなかでも、戦前期においては70%ほどがアメリカ映画で、16%がイギリス映画、13%が中国映画となっており、ハリウッドの支配的な力が現れている [Uhde and Uhde 2010: 23]。こうしたシンガポールにおけるアメリカ映画の圧倒的な力は、1940年代に映画工作を試みた日本人によっても語られている。『映画旬報』1942年4月1日号の特集「南方映画事情」では、東南アジア各地においてアメリカ映画が全盛であると紹介されており、その普及状況として、シンガポール（海峡植民地を含む）においては約80%を占めていると記されている [土屋 1942: 22]。

1942年2月にシンガポールが日本軍によって占領された後、シンガポールの劇場は日本風の名称に改められた。当時の南方映画事情を内地に報告していた字幕翻訳家で、後に映画配給社南方局業務部長を務める田村幸彦によれば、戦前のシンガポールでは38の映画館があったが、記事執筆時点（シンガポール占領満6ヶ月とあるので1942年8月と推測される）で11館が開館、2館が近日開館、25館が閉館とのことである [田村 1942: 23]。日本の占領開始後、市民に対して映画上映が再開されたのは陸軍報道班員の北町一郎によれば1942年4月5日のことである [北町 1942: 13-14]。

4-1. 英米作品禁止（1943年8月）までの上映作品

1942年5月になると、新聞において各劇場で上映される作品が紹介されるようになる。当初、日本映画はほとんど上映されず、戦前と同様にアメリカの作品を中心にその他広東語やマレー語、インド諸言語の作品が上映されていた。正確な上映回数などは確認できていないが、紙面での上映プログラムを見る限り、アメリカの作品が他を圧倒している。

1942年時点ではシンガポールにおける日本の劇映画は極めて少なく、現地住民向けに上映可能な現地語版はさらに限られていた。日本のニュース映画は各劇場で上映されていたようであるが、一般向けの劇場における日本の劇映画の上映はこの時期には確認できない。田村幸彦は『映画旬報』における記事のなかで、1942年8月時点において「マレーに対しては、残念ながら未だ日本の劇映画は一本も提供されていない」と述べている [田村 1942: 23]。南洋映画協会が公表した1942年8月10日時点での現地在庫一覧によると、昭南島支社のニュース映画を除く在庫は『孫悟空』（日本版）、『純情二重奏』（日本版）、『将軍と参謀と兵』（日本版）、『南海の花束』（日本版）、『北極光』（日本版）、『熱砂の誓』（日本版）、『地下鉄の出来るまで』（英版）、『田園交響楽』（英版）、『西住戦車長伝』（邦版）である [「南方映画工作 座談会」: 22]。これらの作品は *Syonan Times* に掲載されたプログラムによれば、1942年9月以降、日本軍兵士専用⁽¹⁾に上映されたようである。

1943年になり、映配が映画興行を統制するようになった後も、アメリカ作品中心の上映はしばらく続く。劇場ごとの上映内容については大きな変化は見られないが、日本軍兵士専用であった芙蓉劇場は『支那の夜』、『一乗寺決闘』、『男の花道』(1941)、『婦系図』(1942)、『水戸黄門漫遊記』(1937)など前年の南洋映画協会の在庫になかった日本の劇映画を上映するようになる。また、1942年12月ころには1942年8月時点で準備中であった大東亜劇場も開館しており、芙蓉劇場と同じく日本軍兵士専用の劇場となった。ここでも芙蓉劇場と同様、『大阪町人』(1942)、『間諜未だ死せず』(1942)、『婦系図』などの日本の劇映画、そして、『東洋の凱歌』といった文化映画が上映されている。芙蓉劇場と大東亜劇場での上映プログラムは1943年2月を最後に新聞紙面では紹介されておらず、その後の上演内容については不明である。大東亜劇場とともに準備中であった共栄劇場も1942年12月には再開しており、こちらは洋画を上映する劇場となった。共栄劇場、昭和劇場、潮劇場、馬來劇場ではアメリカ作品が上映され続けた。1943年1月以降に上映されたアメリカ映画としては、『血と砂』(*Blood and Sand*, 1941、共栄劇場、1943年1月上映)、『地獄への逆襲』(*The Return of Frank James*, 1940、昭和劇場、1943年1月上映)、『フランケンシュタインの復活』(*Son of Frankenstein*, 1939、潮劇場、1943年3月上映)、『コンドル』(*Only Angels Have Wings*, 1939、共栄劇場、1943年4月上映)、『紀元前百万年』(*One Million B. C.*, 1940、共栄劇場、1943年5月上映)、『ハリケーン・エクスプレス』(*The Hurricane Express*, 1932、潮劇場、1943年6月上映)、『美人劇場』(共栄劇場、1943年7月上映)などがあげられる。

1943年8月31日をもって、シンガポールでは英米の作品の上映は禁止されることになる。それまでの時期においては、日本軍兵士専用の映画館で日本の劇映画が上映されたり、特別な機会に一般向けに日本の作品が上映されることもあったが、検閲を経たとはいえ、日本占領下シンガポールにおいて上映される映画の多くはアメリカの作品であった。そうした映画興行のあり方は、映配という南方映画工作において強力な統制力を期待された組織が映画興行を担ってからも同様であった。日本軍がシンガポールを占領してから1年半、南方映画工作の方針策定から1年の間、シンガポールにおける映画工作はアメリカ映画の圧倒的な力に頼らざるを得なかったといえる。

4-2. 英米作品禁止以降の上映作品

1943年9月以降は、英米の作品が全面的に上映禁止となっており、それらに代わって日本映画中心のプログラムが組まれるようになった。筆者が確認した限りで、延べ5週以上上映された映画は上述の作品も含め、以下の通りである。『愛機南へ飛ぶ』(1943、6週)、『愛の一家』(1941、5週)、『愛の世界』(1943、5週)、『あの旗を撃て』(1944、6週)、『英国崩るるの日』(1942、6週)、『男』(1943、6週)、『海軍戦記』(1943、5週)、

『結婚命令』(1943、5週)、『支那の夜』(1940、6週)、『シンガポール総攻撃』(1943、6週)、『姿三四郎』(1943、7週)、『青春の気流』(1942、6週)、『戦ひの街』(1943、7週)、『翼の凱歌』(1942、5週)、『田園交響楽』(1937、7週)、『奴隸船』(1943、5週)、『南海の花束』(1942、7週)、『西住戦車長伝』(1940、5週)、『二刀流開眼』(1943、5週)、『母子草』(1942、5週)、『萬世流芳』(1942、5週)、『望楼の決死隊』(1943、5週)、『微笑の国』(1942、5週)、『若き日の歓び』(1943、5週)である。映画上映の詳細については不明な点も多く、新聞紙面から読み取れる情報には限界があるが、おおよその傾向はつかめるのではないかと考えられる。日本軍を取り上げた作品が多いものの、必ずしも時局を反映したとは言えない作品も見られる。

新聞紙上では、特集記事が組まれたり、また評論記事が掲載されたりすることも多かった。特集記事が確認されるのは、『シンガポール総攻撃』、『愛機南へ飛ぶ』、『翼の凱歌』の3作品で、そのなかでも最も大きく取り上げられたのが1943年9月23日に共栄劇場と昭和劇場で同時に公開された劇映画『シンガポール総攻撃』である。同作品はマラヤでの現地ロケを行ってマレー作戦を劇映画化した大映作品である。監督は島耕二で1943年4月に日本内地で公開されている。1943年12月5日には「大東亜戦争2周年記念」として『愛機南へ飛ぶ』と『翼の凱歌』が、いずれも航空戦における日本軍の「強さ」を誇示する形で紹介が行われている。

これらの特集記事のほか、紙面ではたびたび映画評論の記事 **Movie Review** が掲載されている。右に筆者が確認できた記事一覧を示す。

多くの場合、特定の作品に焦点を当てた批評となっており、また日本の劇映画が中心的に取り上げられていること、さらに一つの作品が複数回取り上げられることがしばしばあることが読み取れる。特に多く取り上げられているのが、『シンガポール総攻撃』(5回)、『田園交響楽』(4回)、『支那の夜』(3回)、『愛の一家』(3回)などである。これら映画批評記事の中心はやはり日本の劇映画にあると見ていいだろう。

これら特集記事や評論記事の特徴については以下のように整理できる。『シンガポール総攻撃』など南方占領地を舞台とした作品や、『翼の凱歌』など日本軍の力を誇示する作品が多く紹介される一方で、『田園交響楽』や『支那の夜』、『愛の一家』など戦争を直接取り上げた作品以外にも大々的に新聞紙上で紹介されている。しかし、こうした戦争を直接取り上げていない作品についても、日本人の精神性を強調したり、国家や帝国の物語と結びつけたりするなど、現地住民の教化を意識した解説がなされている。

5. 両都市の比較から見えること

ここで香港とシンガポールの類似点と相違点をまとめてみたい。まず、類似点について

表1 Syonan Sinbun/Syonan Shimbun に掲載された Movie Review

掲載日	内容	掲載日	内容
1943年8月31日	英国崩れるの日	1943年11月2日	スポーツの一年
1943年9月1日	英米作品禁止と日本映画について	1943年11月4日	漫画映画(桃太郎の海鷲)
1943年9月6日	田園交響楽	1943年11月5日	燃ゆる大空
1943年9月7日	田園交響楽	1943年11月6日	海鷲
1943年9月10日	田園交響楽	1943年11月12日	世界に告ぐ
1943年9月10日	田園交響楽	1943年11月25日	愛機南へ飛ぶ
1943年9月16日	文化映画(潮文化劇場)について	1943年11月29日	愛機南へ飛ぶ
1943年9月22日	シンガポール総攻撃	1943年12月3日	翼の凱歌
1943年9月23日	シンガポール総攻撃	1943年12月12日	青空交響楽
1943年9月24日	シンガポール総攻撃	1944年1月2日	決戦の大空へ
1943年9月25日	シンガポール総攻撃	1944年1月19日	決戦の大空へ
1943年9月28日	シンガポール総攻撃	1944年1月27日	鉄扇公主
1943年9月29日	支那の夜	1944年2月5日	ニュース映画について
1943年10月1日	支那の夜	1944年2月10日	海に翻る日章旗
1943年10月2日	支那の夜	1944年2月11日	陸軍航空戦記
1943年10月9日	南海の花東	1944年3月15日	南の願望
1943年10月14日	男	1944年3月16日	世界に告ぐ
1943年10月15日	青春の気流	1944年3月31日	新しき土
1943年10月16日	男	1944年4月1日	熱風
1943年10月20日	ニュース映画(潮文化劇場)について	1944年4月11日	あの旗を撃て
1943年10月26日	愛の一家	1944年4月12日	出征前十二時間
1943年10月27日	愛の一家	1944年4月15日	あの旗を撃て
1943年10月29日	愛の一家	1944年4月22日	海軍
		1944年5月17日	公衆衛生に関する文化映画について

は以下の二点が指摘できる。第一に、軍政初期におけるアメリカ映画の利用である。両都市とも、戦前期にはアメリカ映画が非常に大きな影響力を持っていた。そうした状況もあり、日本軍による軍政開始間もなくは多くのアメリカ映画を、検閲をしながらも、利用した。対英米戦争にあってもアメリカ映画がただちに上映禁止とならなかった背景として、既存映画市場に対する工作において、現地住民教化のみならず治安維持が大きな目的となっていたことが指摘されている。現地の映画市場がアメリカ映画の配給市場となっている南方占領地では、平常通り観客を来場させ興行を継続させるにはアメリカ作品の上映が不可欠であり、それが市民生活確保のバロメーターとなっていた [加藤 2003: 206]。特にシンガポールでは、『風と共に去りぬ』など未封切大作をはじめとして約2000本、約2年分のアメリカ作品のストックがあると言われており、補充できる日本映画が少ないという本音ゆえ、「南方民族をして日本人の寛仁大度を諒解せしめる工作」という建前のもと、「敵性映画」が上映され続けた [加藤 2003: 212]。

第二に、選定映画がそのまま放映されたわけではないという点があげられる。ここで改めて末尾の選定映画一覧を見ておきたい。表は雑誌『日本映画』に掲載されたものに香港とシンガポールでの上映状況を加筆したものである。HK とある列が香港での上映状況、

SGとある列がシンガポールでの上映状況である。日本軍の占領期間中に上映されたものについては「○」を、対象地域が異なっている場合には「-」を、対象地域が異なっているものの上映された場合には「×」を付してある。上映の可能性があるが、作品名などから完全な特定に至らないものを「？」とした。本研究で使用した史料には一部欠落があるため完全な表となっていない恐れがあるが、大まかな傾向は指摘できるだろう。劇映画について言えば、香港で対象49作品中37作品が、シンガポールで対象50作品中31作品が上映されたと確認できる。ここで指摘できるのは、上映が確認されない選定作品の多さである。史料の欠落の可能性を考慮しても、上映が確認される作品が対象の3分の2程度にとどまっており、選定作品がそのまま現地へと送付され上映されたわけではないことがわかる。また、実際に個々の作品の上映時期を見ると、選定映画についても選定以前に上映されているなど、現地での映画上映は選定委員会の選定と関わりなく行われていた事実も指摘できる。先に映配現地責任者が選定委員会を批判した様子を紹介したが、それぞれ現地の事情に応じて上映作品を選んでいった様子がうかがえる。

香港とシンガポールの相違点については、二点ほど指摘できる。第一に、香港がシンガポールと比べて半年以上早く英米の映画上映を停止している点である。英米の作品の上映停止は、南方占領地のなかでも香港で最初に実行されている〔東洋経済新報社編 1944: 293〕。その背景としては、香港に多数の中国語映画のストックがあったことが指摘されている。前述の『日本映画』の記述とは別に、戦時期香港の映画興行に関するいまひとつの公式記録が『軍政下の香港』に掲載されている。それによると、1943年に封切られた日本映画は57（うち8作品は記録映画およびアニメ作品）なのに対して、中国語映画については北京語映画が58、広東語映画が9となっている〔東洋経済新報社編 1944: 294〕。

これと関連し、第二に香港で多数の中国語映画・日本映画を供給し得た、配給のネットワークの存在があげられる。香港では、過去の広東語映画のほか、新華、中聯、華影の作品が多く供給されている。シンガポールにおいても『萬紫千紅』や『萬世流芳』など、上海で製作された作品が上映されているが、香港と比べると少数しか確認できない。また、日本映画についても、香港ではシンガポールでの上映が確認されない作品が多く紙面で確認できる。史料の欠落がある中での比較であるが、香港で上映されてシンガポールでの上映が確認できない日本映画は戦時期を通じて60作品を超える。

香港とシンガポールでは、映画興行のあり方について軍政初期にアメリカ映画が多く上映されていたという類似点があるものの、上映される作品が異なるという点で、大きな相違点をもつ。これは両都市における映画の供給ネットワークが異なっているためと考えられる。

6. おわりに

以上、戦時期の香港とシンガポールにおける映画上映について見てきたが、最後にそこで得られた成果と残された課題についてまとめたい。両都市とも、上映される映画については、対外映画選定委員会の選定映画と多く重なるものの、必ずしも日本内地の南方映画工作の方針に沿って上映映画が決定されていたのではなく、それぞれの地域の事情に応じて個別に方針が決定されていたことがわかる。英米の作品の上映停止のタイミングが大きく異なっていること、またどのような映画をどれだけ上映するか、どのような映画をどのような形で住民に紹介していくかといったことが両都市で異なっていたことは、それぞれの映画上映に関する方針が個別に決定されていたことを意味すると見ていいだろう。それは単に現地の民族構成にとどまらず、映画の供給システムの違いに大きく起因するものと考えられる。こうした点について実証的に違いを見出し、日本の帝国支配のあり方と占領地における戦争とメディアの関係について、より詳細に解明していくための示唆を得たことは本研究の成果と言えよう。

一方で、さらなる課題も浮かび上がってくる。1942年に決定された南方映画工作の方針では、南方占領地に対するフィルムの供給を一元化することが謳われていた。しかし、現実には2つの占領地において供給されたフィルムには大きな違いがあった。その違いは何に起因するものであるのか。それぞれの占領地にフィルムを供給するシステムが一体どのようなものであったのかについての解明は、さらなる史料の検討を必要とする。さらに、本稿では香港とシンガポールという2つの占領地を事例として取り上げたが、他の統治集団によって支配された占領地においてはどうだったのか。こうした事例をさらに積み重ねていくことが必要となろう。

表 2 対外映画選定委員会選定映画一覧表 (『日本映画』改新12号、1944をもとに改変)

劇映画

昭和18年度 (1942年12月22日～1943年12月28日)

題名	製作会社	種別	改訂	送付地域	HK	SG
水滸伝	東宝	時代		南方全域	○	○
阿片戦争	東宝	時代		南方全域	○	○
胡蝶美人	宝塚	現代		華僑向	○	
戦ひの街	松竹	現代		華僑向	○	○
御碑亭	華北	時代		華僑向		
華かなる幻想	大映	現代	○	南方全域	○	○
姿三四郎	東宝	時代	○	泰・仏印・比	×	×
シンガポール総攻撃	大映	現代	○	南方全域	○	○
電撃二重奏	日活	現代		南方全域	○	
若き日の飲び	東宝	現代	○	南方全域	○	○
男	東宝	現代		南方全域	○	○
鉄の愛情	日活	現代		南方全域	○	
マライの虎	大映	現代	○	南方全域	○	
愛の世界	東宝	現代		南方全域	○	○
青春の気流	東宝	現代		南方全域	○	○
独眼龍政宗	大映	時代		南方全域	○	
我が家の風	大映	現代		南方全域	○	○
青空交響楽	大映	現代	○	南方全域	○	○
結婚命令	大映	現代	○	南方全域	○	○
奴隷船	大映	時代		南方全域	○	○
愛機南へ飛ぶ	松竹	現代	○	南方全域	○	○
決戦の大空へ	東宝	現代	○	南方全域	○	○
歡樂年々	中華	現代		南方全域	○	
熱風	東宝	現代		南方全域	○	○
秘めたる覚悟	東宝	現代	○	南方全域	○	
結婚の生態	南旺	現代	○	南方全域	○	○
出征前十二時間	大映	現代	○	南方全域	○	
海軍	松竹	現代		南方全域	○	○
おぼあさん	松竹	現代	○	南方全域	○	○
世界に告ぐ	独トービス	時代		南方全域	○	

昭和19年度 (1944年1月11日～1944年9月18日)

題名	製作会社	種別	改訂	送付地域	HK	SG
勝鬨音頭	松竹	現代		南方全域	○	○
あの旗を撃て	東宝	現代		南方全域	○	○
緑の大地	東宝	現代		比島向	—	—
加藤隼戦闘機	東宝	現代	○	南方全域	○	○
不沈艦撃沈	松竹	現代	○	南方全域	○	○
蘇州の夜	松竹	現代	○	南方全域	○	○
萬紫千紅	中華	現代		華僑向	○	○
女性航路	松竹	現代	○	南方全域	○	
萬世流芳	中華	時代		華僑向	○	○
鉄扇公主	中華	時代		華僑向	○	
怒りの海	東宝	現代	○	南方全域	○	○
水兵さん	松竹	現代		南方全域	○	○
命の港	東宝	現代		南方全域	○	
高田馬場前後	大映	時代		昭南泰セレベス向	—	—
三太郎頑張る	松竹	現代		南方全域	○	
恨不相逢未嫁時	中華	現代		華僑向	○	
日常の戦ひ	東宝	現代		南方全域	○	
世紀の合唱	東宝	現代		泰比島向	—	—
誓ひの合唱	東宝	現代		比島向	—	—
待ってゐた男	東宝	時代		泰向	—	—
美しき鷹	東宝	現代		比島向	—	—
五重塔	大映	時代		南方全域	○	
激流	松竹	現代		南方全域	○	
碧血艶影	満映	現代		比島向	—	—
敵は幾万ありとも	東宝	現代		南方全域	○	
四つの結婚	東宝	現代		南方全域	○	
肉弾挺身隊	大映	現代		南方全域	○	

改訂欄に○印を付した映画は対外映画選定委員会の決定に基づき、南方向け映画として不適当な場面・挿話の一部を削除または改変したもの

記録映画

昭和18年度 (1942年12月22日～1943年12月28日)

題名	製作会社	南方向作品	HK	SG
東洋の凱歌	日映		○	○
帝国海軍勝利の記録	日映		○	○
基地の建設	日映			
航空戦記	日映			?
海軍病院船	日映			○
富士に誓ふ	日映		○	○

昭和19年度 (1944年1月11日～1944年9月18日)

題名	製作会社	南方向作品	HK	SG
轟沈 (対外版)	日映		○	○
大いなる翼	南方現地軍		○	

ニュース特集

昭和18年度 (1942年12月22日～1943年12月28日)

題名	製作会社	南方向作品	HK	SG
帝国海軍	日映		○	
比島独立	日映		○	
大東亜会議	日映		○	

昭和19年度 (1944年1月11日～1944年9月18日)

題名	製作会社	南方向作品	HK	SG
太平洋ノ凱歌	日映		○	
ラバウル前線報告	日映		○	

日本占領下の香港とシンガポールにおける戦争とメディア

文化映画

昭和18年度 (1942年12月22日～1943年12月21日)

題名	製作会社	南方向作品	HK	SG
愛国の花	日映	○		
僕等の団結	日映	○		
ラヂオトーキョウ	国際観光局	○		
僕等は日本少国民	日映			
慈悲心鳥	理研			
富士山	国際観光局	○		
銃後の日本	国際文化振興会	○		
日本の大学	日映	○		
鴨緑江ダム	日映			
スポーツ一年	東亜発声	○		
アイウエオの歌	日映	○		?
法隆寺	日映			
マー坊の落下傘部隊 (漫画)	佐藤映画			
お山の防空陣 (漫画)	加藤商会			
ナカヨシ行進曲	朝日			
可愛い慰問隊	朝日			
枕木	満鉄			
雪の進軍	国際観光局	○		
第十二次日本競馬	日映			
海の探求	理研			
日本の城	国際文化振興会	○		
田植競争	朝日			
海のますらを	国際観光局	○		
ウミ	朝日	○		
石油のボルネオ	日映			
ゲンキナコドモ	朝日	○		
青春の翼	国際観光局	○		
木造船	日本国策映画社			
働き娘たち	日映	○		
ミンナゲンキダ	日映	○		○
決戦の朝	朝日			
ニッポンノウタ	東宝	○		
僕等ノ鉄道	国際観光局	○		
勝利ノ響	満映			

昭和19年度 (1944年1月11日～1944年9月18日)

題名	製作会社	南方向作品	HK	SG
キバセン	朝日	○		
ボウタホシ	朝日	○		
闘球肉弾戦	松竹			
艦隊勤務	朝日			?
日本に留学して (比島版)	朝日	○		
〃 (ボルネオ版)	朝日	○		
〃 (セレベス版)	朝日	○		
南方留学生 (ビルマ版)	日映	○		
〃 (マライ版)	日映	○		
〃 (ジャワ版)	日映	○		
君ヶ代	日映	○		
天長節 他三編	日映	○		
日本の女学生	国際文化振興会	○		
躍進する朝鮮	日映	○		
お猿の国	朝日			
造船日本	日映	○		
スパイニチュウイ (影絵)	朝日	○		
おうま	朝日	○		
空に親しむ子供	朝日	○		
上の空博士 (漫画)	朝日			
精兵の礎	理研			
ナハトビ	日映	○		
ソラノミナト	朝日	○		
穀倉満洲	満映			
自転車	東亜交通公社	○		
空に征く	東亜交通公社	○		
竹 (改編)	東亜交通公社	○ (ビルマ向)	—	—
日本の陶磁器 (改編)	国際文化振興会	○ (ビルマ向)	—	—
陸鷲誕生	朝日			
ワレラノカウシン	日映	○		

南方向作品の欄に○印を付したものは、もっぱら対外啓発宣伝用として作成されたもので、○印のないものは国内向け既成作品中より選定したものである。

文献

- Akashi, Yoji. 1976. "Education and Indoctrination Policy in Malaya and Singapore under Japanese Rule, 1942–1945." *Malaysian Journal of Education*, 13 (1/2): 1–46.
- Fu, Poshek. 2003. *Between Shanghai and Hong Kong: The Politics of Chinese Cinemas*. Redwood City, CA: Stanford University Press.
- Goodman, Grant K. ed. 1991. *Japanese Cultural Policies in Southeast Asia during World War 2*. Basingstoke: Macmillan.
- Ng, Wai Ming Benjamn. 2014. "A Comparative Study of Japanese Cultural Policies in Hong Kong and Singapore during the Occupation Period, 1942–1945." In *Japan and Southeast Asia: Continuity and Change in Modern Times*, edited by Teow See Heng, Lydia N. Yu-Jose, Ricardo Trota Jose and Yoshimura Mako, 79–92. Manila: Ateneo de Manila Press.
- Uhde, Jan and Yvonne Ng Uhde. 2010. *Latent Images: Films in Singapore*. Singapore: Ridge Press.
- 晏妮. 2010. 『戦時日中映画交渉史』岩波書店.
- 岩崎育夫. 2007. 『アジア二都物語：シンガポールと香港』中央公論新社.

- 加藤厚子. 2003. 『総動員体制と映画』新曜社.
- 北町一郎. 1942. 「昭南と映画」『映画旬報』1942年7月1日号: 13-15.
- 邱淑婷. 2007. 『香港・日本映画交流史: アジア映画ネットワークのルーツを探る』東京大学出版会.
- 倉沢愛子. 2009. 「宣伝メディアとしての映画: 日本軍占領下のジャワにおける映画製作と上映」奥村賢編『映画と戦争: 撮る欲望/見る欲望』93-137. 森話社.
- 田村幸彦. 1942. 「マレーの映画界」『映画旬報』1942年10月1日号: 23-24.
- 田村幸彦. 1943. 「南方映画工作の現状」『映画旬報』1943年4月11日号: 67-69.
- 土屋齊. 1942. 「南方映画事情」『映画旬報』1942年4月1日号: 22.
- 東洋経済新報社編. 1944. 『軍政下の香港』香港: 香港東洋経済社. (濱下武志・李培徳監修・解説. 2014. 『香港都市案内集成第10巻』ゆまに書房として復刻)
- 松岡昌和. 2015. 「映画の「南進」: アジア太平洋戦争期南方向け映画工作に関する議論」『秀明大学紀要』第12号: 95-90.
- 松岡昌和. 2017. 「『昭南島』における日本映画: 『近代化モデル』のメディアとしてのフィルム」『植民地教育史研究年報』第19号: 65-85.
- 余慕雲. 1998. 『香港電影史話(卷三)四十年代』次文化堂.
- 四方田犬彦. 2011. 『李香蘭と原節子』岩波書店.
- 和久田幸助. 1991. 『日本占領下香港で何をしたか』岩波書店.
- 「対外映画選定委員会選定映画一覧表」. 1944. 『日本映画』改新12号: 436-438.
- 「南方映画工作 座談会」『映画旬報』1942年10月1日号: 15-22.
- 「南方映画工作の現段階 座談会」. 1943. 『映画旬報』1943年7月1日号: 19-25.
- Syonan Times*, 1942. (国立国会図書館東京本館所蔵、マイクロフィルム)
- Syonan Sinbun*, 1942-1943. (国立国会図書館東京本館所蔵、マイクロフィルム)
- Syonan Shimbun*, 1943-1945. (国立国会図書館東京本館所蔵、マイクロフィルム)
- 『香港日報』1942-1945. (香港大学図書館所蔵、マイクロフィルム)